

論文主旨

大学生における，対人関係要因が援助要請スタイルに与える影響及び，援助要請スタイルと抑うつ感との関連性の研究

松本卓哉

A study of the influence of interpersonal factors on help-seeking style and the relationship between help-seeking style and depression among college students

問題と目的

個人が問題を抱え，それを自身の力では解決できない場合に，必要に応じて他者に援助を求める事は重要な対処方略の一つとなる（永井，2010）。こうした他者に助けを求める現象は援助要請と呼ばれる（DePaulo, 1983）。

援助要請は日本ではここ10年ほどで急速に研究が増加している分野である（水野，2017）。その中で最も頻繁に扱われるテーマは，援助要請の促進・抑制要因の研究である（永井，2017）。その要因は数多く報告され，ネットワーク変数，パーソナリティ変数，個人の問題の深刻さ・症状，デモグラフィック要因の4領域に大別される（水野・石隅，1999）が，研究間では結果の不一致が見られる事も多い（Li, Dorstyn, & Denson, 2014）。

一方こうした研究の背後には，困難時には援助要請を行う事が望ましいという前提がある。そのため殆どの先行研究は，援助要請を行うか行わないかの援助要請の量のみが問題とされている（永井，2013）。だが，他者に援助を求める事は必ずしも常に望ましいとは限らない。そのため，近年どのように援助要請をするかという，援助要請の質でもある援助要請のスタイルを区別する事の重要性が指摘されている（e. g., 池田・磯崎，2021）。

この観点から永井（2013）は，困難を抱えても自身での問題解決を試み，解決が困難な場合にのみ援助を要請する傾向である援助要請自立型，問題が深刻でなく本来なら自分自身で取り組むことが可能でも，安易に援助を要請する傾向である援助要請過剰型，そして問題の程度にかかわらず，一貫して援助を要請しない傾向である援助要請回避型と言う援助要請3スタイルを見出した（水野，2017）（以下，援助要請自立型を自立型傾向，援助要請過剰型を過剰型傾向，援助要請回避型を回避型傾向，援助要請スタイルをスタイルと記す）。

援助要請スタイル尺度は一定の信頼性と妥当性が報告されている一方で，2つの課題が指摘されている。各スタイルをもたらす要因を明らかにする事と，スタイルが個人に及ぼす影響についての検討である（永井，2013）。本研究ではこの2課題に着目して研究を行う。

援助要請は一連の対人行動として成立する（高木，1997）。こうした対人行動の実行には，対人関係に対する認知や能力が重要な要素となると考えられる（永井・松田，2014）。よって対人関係上の認知や能力の差異は，スタイル毎の差異に関連すると考えられる。この観点から本研究では第1の課題に対し，対人関係要因として，被受容感，被拒絶感，甘えの

断念、社会的スキルを取り上げ、これらの階層関係を考慮しながらスタイルに与える影響を共分散構造分析等により検討する事を目的とする。

先行研究 (e. g., 杉山・宮下, 2018) から、被受容感と被拒絶感が、甘えの断念と社会的スキルに影響を与えるという階層関係の可能性が考えられ、その上で各変数からスタイルに対して以下のような直接の影響が示されると考えられる。

仮説 1：自立型傾向に対して、被受容感が正の、被拒絶感が負の、社会的スキルが正の影響を与える。甘えの断念は有意な影響を与えない

仮説 2：過剰型傾向に関して、被受容感が正の、被拒絶感が正の、甘えの断念が負の、社会的スキルが正の影響を与える。但し被拒絶感は、正と負の両方の可能性が考えられるため、被拒絶感の高さが又は低さが過剰型を促進するのか、両方の観点を踏まえつつ検討する

仮説 3：回避型傾向に対して、被受容感が負の、被拒絶感が正の、甘えの断念が正の、社会的スキルが負の影響を与える

第 2 の課題である、スタイルの違いが個人に及ぼす影響の検討に関しては、抑うつ感 (杉山, 2018) を取り上げる。抑うつは援助要請の研究で、これまで主に要因として扱われてきた変数の一つである。援助要請の要因研究において、抑うつは、無気力や問題対処意思の低下を生じさせるため、援助要請と負の関連が指摘されているが (Garland & Zigler, 1994)、実際は抑うつによる援助要請の低下を支持しない結果 (Kelly & Achter, 1995) の両方が見られている。一方抑うつを要因ではなく、スタイルが個人に及ぼす影響としての観点から検討した研究は少ない。そこで本研究では二つのモデルを設定し、共分散構造分析によってどちらが採択されるか検証する方法により検討する。

仮説モデル A：援助要請スタイルの違いが抑うつ感に影響を与える

仮説モデル B：抑うつ感は援助要請スタイルに影響を与える要因

また先行研究から援助要請は女性が男性より高い事が示されているが、実際そのメカニズムについては十分解明されている訳ではない (永井・鈴木, 2018) ため、本研究においては男女別に検討を行う。

方法

調査対象者 4年生大学1校における大学生を対象に GoogleForm による無記名式オンライン調査を実施した。18歳から24歳に該当する324名 (男性113名, 女性207名, その他4名, 平均年齢=19.81, SD=1.40) を対象とした。

調査内容 質問紙はフェイスシートと以下の内容で構成された。

- (1) 援助要請スタイル尺度 (永井, 2013)
- (2) 被受容感尺度 (杉山・坂本, 2006)
- (3) 被拒絶感尺度 (杉山・坂本, 2006)
- (4) 甘えの断念尺度 (杉山・坂本, 2001)
- (5) KiSS-18 (菊池, 1988)
- (6) 抑うつ感尺度 (杉山, 2018)

結果と考察

相関分析の結果、被受容感と被拒絶感の相関が先行研究 (e. g., 杉山・坂本, 2006) に比べ男性 $r=.73$, 女性 $r=.59$ とかなり高く、効果が干渉しあう可能性があるため以降の検討では被受容感を除き実施する事とした。

1. 被拒絶感, 甘えの断念, 社会的スキルが援助要請スタイルに与える影響の検討

共分散構造分析の結果, 男性モデル (Figure1) の適合度は, $GFI=.984$, $AGFI=.932$, $CFI=.994$, $RMSEA=.037$, $AIC=37.768$ であり, 女性モデル (Figure2) は, $GFI=.997$, $AGFI=.988$, $CFI=1.000$, $RMSEA=.000$, $AIC=33.743$ であり, 両モデルとも一定の妥当性があると考えられる。

①自立型傾向 (仮説 1)

男女とも甘えの断念は自立型傾向に影響を与えない事が示唆された。以下は男女で異なる可能性が示唆された。被拒絶感は女性では自立型傾向に負の影響を与え, 男性では影響が示唆されなかった。社会的スキルは男性では正の影響を与え, 女性では影響が示唆されなかった。仮説は一部支持され, 一部支持されなかった。

但し $R^2=.03$, $.04$ と低く, また多くの大学生が自立型傾向のスタイルである事が推測されるため, 同じ自立型傾向でも影響の強い要因には個人差が広くある可能性が考えられる。今後, 自立型傾向内における要因毎の個人差を検討する必要があると思われる。

②過剰型傾向 (仮説 2)

男女とも被拒絶感が過剰型傾向を促進し, 甘えの断念が過剰型傾向を抑制する事が示唆された。被拒絶感については両方の可能性が考えられたが, 共分散構造分析の結果からは被拒絶感の過剰型傾向を促進する事が示唆された。以下は男女で異なる可能性が示唆された。社会的スキルは男性では過剰型傾向を促進する事が示唆された一方で, 女性では影響が示唆されなかった。仮説は一部支持され, 一部支持されなかった。

過剰型傾向には, 被拒絶感の高さ, 甘えの断念の低さ, 男性では社会的スキルの高さに関連している事が示唆された。中でも甘えの断念は変数の内で最も大きな影響を示しており, 本研究では甘えの断念の低さが過剰型傾向を過剰型傾向たらしめている側面がある事が示唆された。

また, 相関分析から抑うつ感と負の関連を示した事から考えると, 過剰型傾向が, 援助要請における対人関係の面においては必ずしもネガティブに機能する側面ばかりでない事が示唆された。ただし, その過剰な援助要請を, 相手の都合を考えずに行うならば, ある時に相手から拒否をされる事になり, その積み重ねにより, 精神的健康に負の影響が生じる可能性も否定できない。しかし, 過剰型傾向においては, 果たして支援が必要か否かは, 過剰な援助要請行動の実態把握が十分でなく, 介入の必要性自体を吟味する必要がある (本田・水野, 2017) 事からも, さらなる研究が必要だと思われる。

③回避型傾向 (仮説 3)

男女とも甘えの断念が回避型傾向を促進する事が示唆された。以下は男女で異なる可能性

が示唆された。被拒絶感は男性には間接の影響は示されたが直接の影響は示唆されず、女性では回避型を促進している事が示唆された。仮説は一部支持され、一部支持されなかった。

被拒絶感及び甘えの断念は抑うつに正の影響を与える事が明らかにされており、相関分析でも回避型傾向は抑うつ感と正の関連にある事（男： $\gamma = .31$, $p < .01$, 女： $\gamma = .36$, $p < .01$ ）からも、回避型傾向は何らかの支援が必要な可能性が考えられる。これは先行研究（永井, 2019）と一致する所である。

2. 援助要請スタイルと抑うつ感の関連の検討

共分散構造の結果、男性では仮説モデル A (Figure3) の適合度は $GFI = .995$, $AGFI = .975$, $CFI = 1.000$, $RMSEA = .000$, $AIC = 25.387$ であり、仮説モデル B (Figure4) は $GFI = .991$, $AGFI = .953$, $CFI = 1.000$, $RMSEA = .000$, $AIC = 26.373$ であった。女性では仮説モデル A (Figure5) は $GFI = .998$, $AGFI = .991$, $CFI = 1.000$, $RMSEA = .000$, $AIC = 23.183$ であり、仮説モデル B (Figure6) は $GFI = .999$, $AGFI = .994$, $CFI = 1.000$, $RMSEA = .000$, $AIC = 24.603$ であった。男女両モデルとも一定の妥当性があると考えられる。適合度を比較したところ僅かな差であり、また両モデルとも $CFI = 1.000$, $RMSEA = .000$ と同一であった。これらから片方を棄却し、もう片方のモデルを採択する事は不自然と考えられ、本研究の範囲では判断がつかない結果となった。

この事は、杉山（2005）が抑うつを心理—社会的ダイナミズムの観点から整理し、構築した Depression Spiral Model の観点から考える事が可能と思われる。この知見からは、抑うつは循環的に持続する過程であると捉える事ができる。今回の研究においては縦断的研究でないため、結論付ける事は不可能であるが、スタイルと抑うつには循環の可能性が示唆されたと考えられる。

本研究の限界

男女差が示された被拒絶感と社会的スキルのパス係数の多くは、.20 を下回るのであった。今後より精緻にモデル検討を行う必要がある。

また、相関の強さから被受容感を除いたため、被受容感と援助要請スタイルの関連を検討できなかった。今後、調査方法も含め、被受容感を含んでの要因研究の検討を行う必要がある。

また、援助要請スタイルと抑うつが循環的に持続する過程である可能性が示唆されたが、今後、循環的の可能性を念頭に置いた、縦断的な研究を検討していく必要があると考えられる。

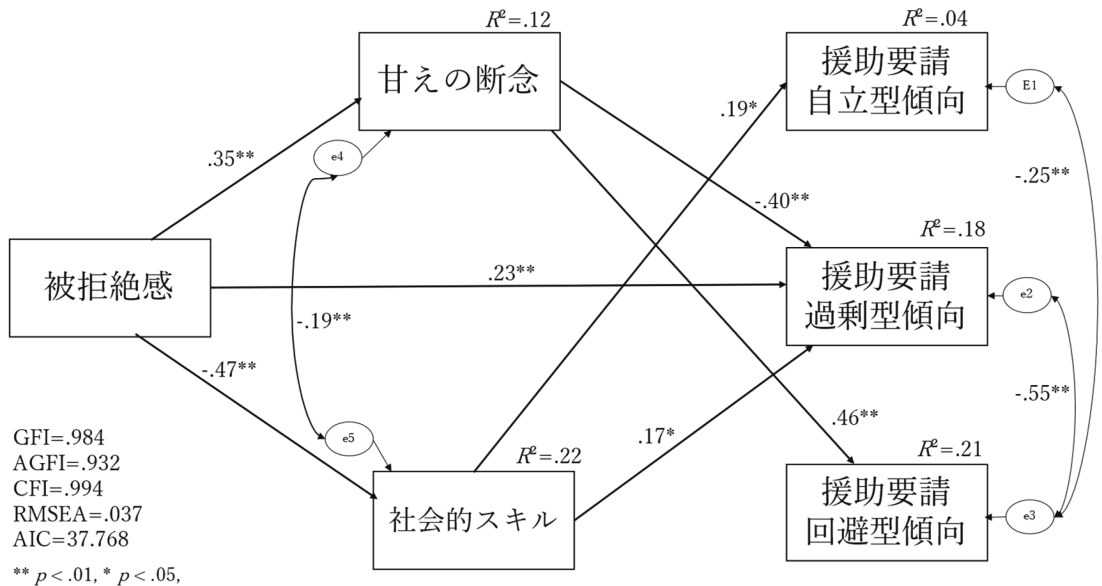


Figure 1 男性モデル

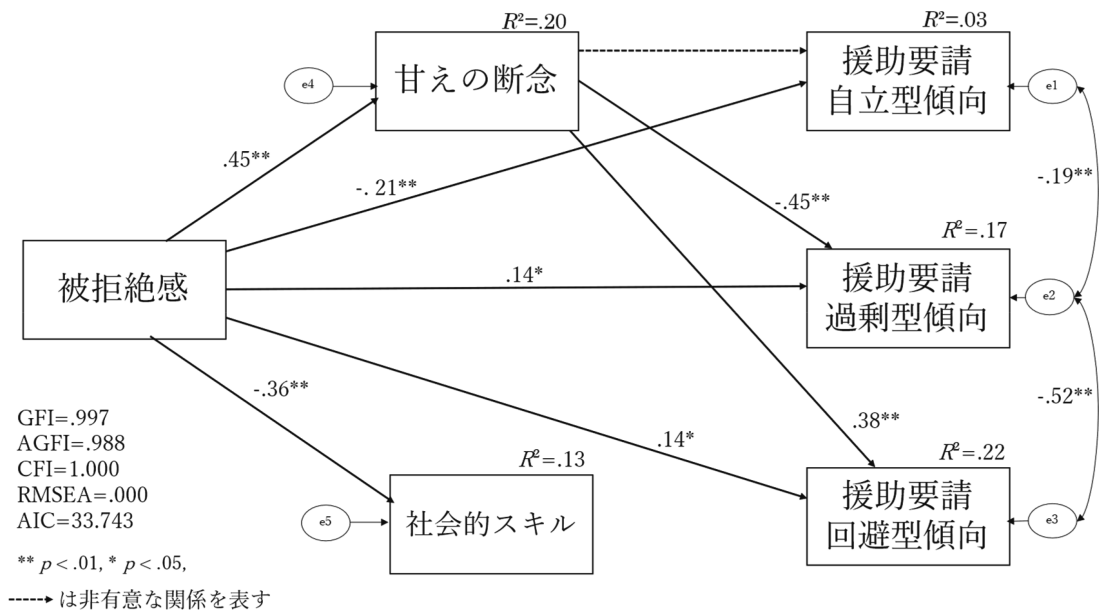


Figure 2 女性モデル

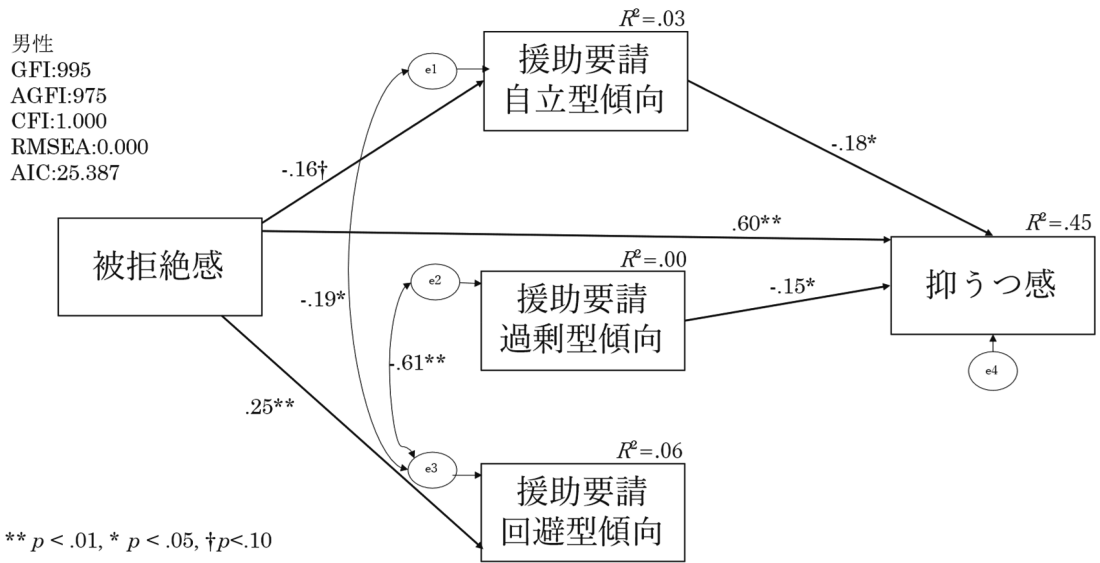


Figure 3 モデル A 男性 援助要請スタイルの違いが抑うつ感に影響を与えるとしたモデル

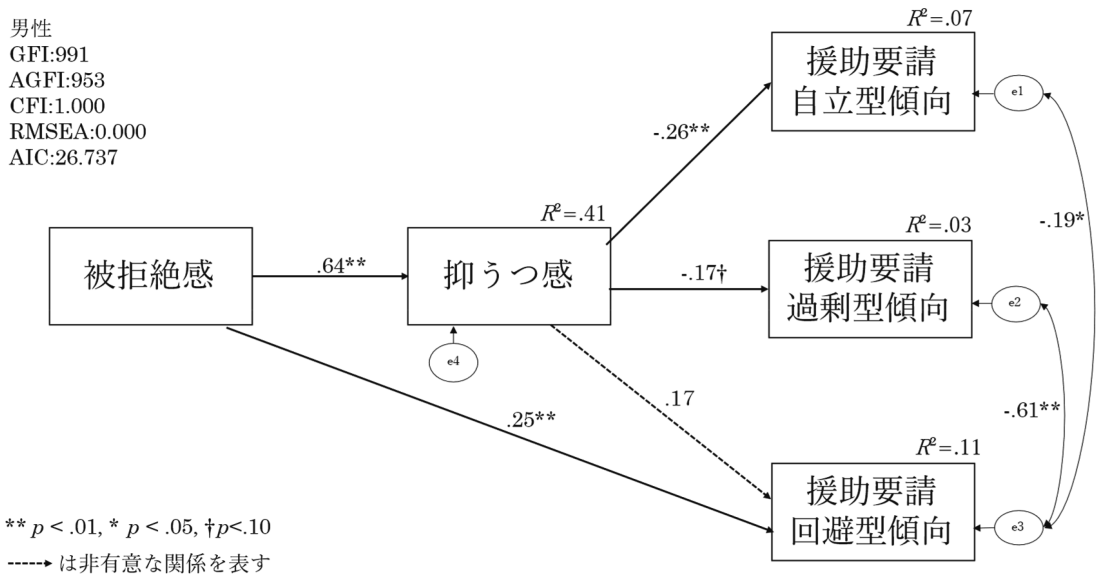


Figure 4 モデル B 男性 抑うつ感 は援助要請スタイルに影響を与える要因としたモデル

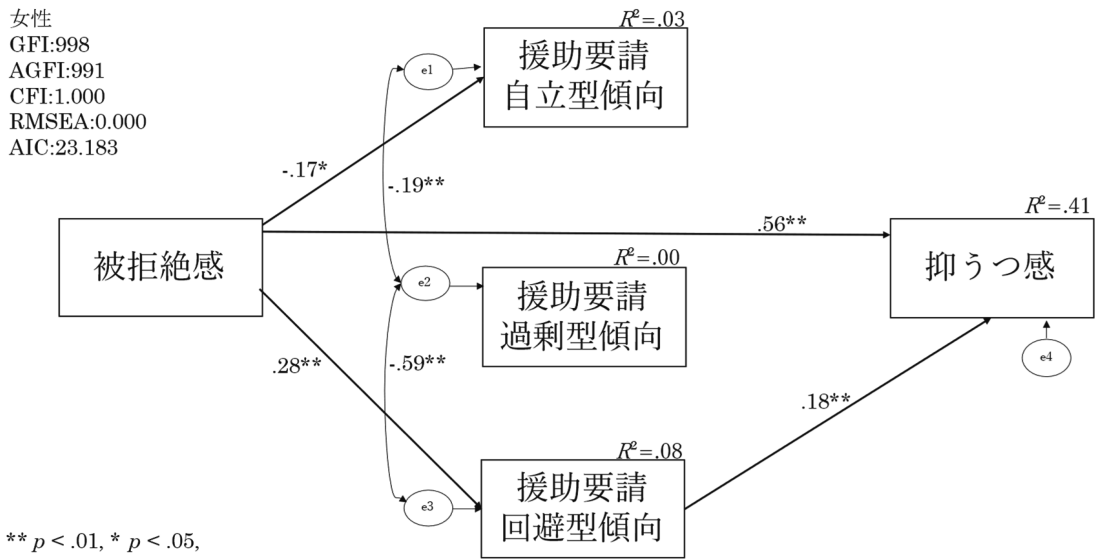


Figure 5 モデル A 女性 援助要請スタイルの違いが抑うつ感に影響を与えるとしたモデル

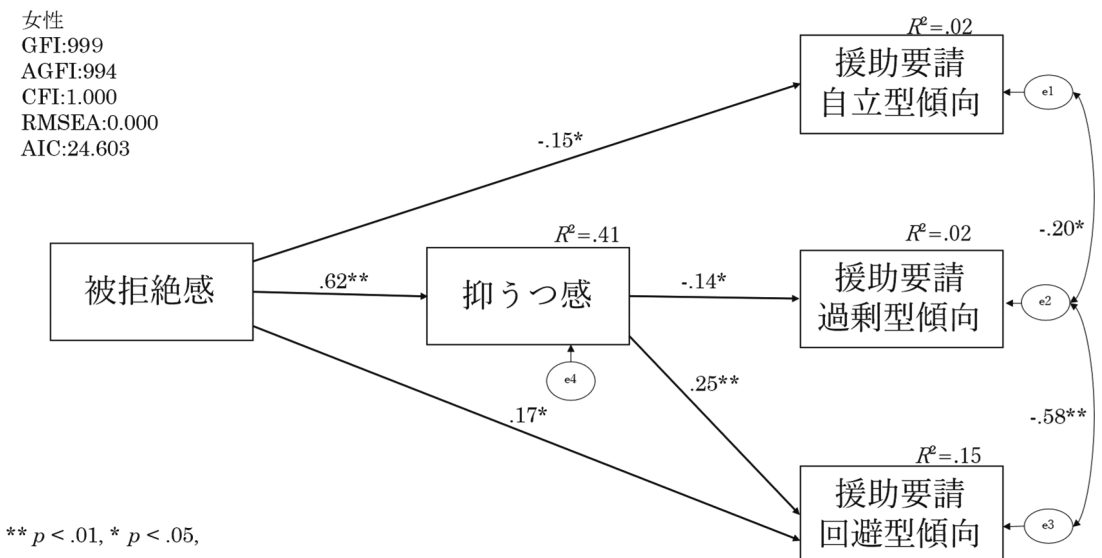


Figure 6 モデル B 女性 抑うつ感 は援助要請スタイルに影響を与える要因としたモデル

